

[インフォルモ]

INFORMO

2011
Summer

Vol.69



政治に志と実を

政治評論家◆三宅久之

古都里

京和傘◆西堀耕太郎

「世界一宣言」が大きな夢実現の第一歩

日本生命保険常務執行役員◆寺田俊文

空手家◆若井敦子



伝統的な京和傘



古都里のペンダント



古都里の自立式スタンド

インタビュー

奥田真祐美

(本誌編集長)

古都里

京和傘◆西堀耕太郎

時代の流れとともに廃れてゆく和の美や技は数知れない。番傘（唐傘）もその一つだ。京都でただ1軒存続している京和傘製造元『日吉屋』に西堀耕太郎さんを訪ねた。

和傘も、仏教やいろいろな文化とともに中国から伝わったもの。最初の用途は身分の高い人が使う日除けや魔除けであり、開いたままの形だった。傘が開閉できるようになったのは安土桃山時代代という。雨傘のない時代は菅傘や蓑を使っていた。

今、傘と言えば洋傘が主流の世の中。それは着物を着る人が少なくなったことが関係しており、それ以上に明治時代に軽くて破れず持ち運びが便利な洋傘が輸入されてからは、人々は和から洋へ移行していった。「和傘の最盛期は昭和の初期で、全国で年間2000万本ほど製造していたようです」と西堀さん。現在、京都以外では岐阜、金沢、鳥取、徳島など10カ所ほどで生産を続けているという。

西堀さんは高校卒業後カナダに留学し、その後和歌山県新宮市役所に勤務。結婚した妻の実家が京和傘の老舗『日吉屋』だった。その店にある和傘の美しさに魅せられた西堀さんは、衰退している伝統をこのまま廃れさせるには忍びないと一大決心。週末には新宮と京都を往復し、和傘作りをビデオに撮って

は技術を勉強した。やがて市役所を退職して『日吉屋』に勤務。29歳の時、4代目当主の急逝を機に5代目を継いだ。

和傘は竹、和紙、糸、漆、木、油などの自然素材を用いて作られ、骨数は30～70本。ちなみに洋傘は布、ポリエステル、ビニール、スチールを使い、骨数は通常8本。



制作過程は、まず竹を糸で繋いで開閉できる骨組みを作る。タピオカ粉を原料に糊を作る。裁断した和紙を貼り、乾燥させてから折りたんでいく。顔料、漆などを塗り、乾かす。さらに亜麻仁油を塗って、天日で数日から2週間干す。その後糸飾りなどの最後の仕上げをする。

美しく上品な色彩と竹と和紙の芸術的な技は、和傘独特の魅力となっている。

西堀さんの理念は「伝統は革新の連続」。和傘が雨具として使われることが減っている以上、今までのやり方に固執していると減るだけ。ホームページを作ってインターネット販売を立ち上げたり、和傘の素材と構造を生かして日本文化を継承しつつ、照明器具に力を注いでいる。和傘の構造を生かしてシェードをたたむことのできる照明器具「古都里」。出来上がった和傘を屋外で干していたとき、和傘を透かして入る光の美しさにヒントを得て、シェードにすることを思いついたという。

現代の建築に合うようデザイナーとのコラボレーションで、新しい分野を広げていきたいと、海外の展示会にも積極的に出展。日吉屋の職人は20代の若者ばかりだ。西堀さんの熱意と発想は着実に実現へ歩み出している。

(にしほり・こうたろう)

1974年和歌山県生まれ。地方公務員を経て日吉屋に入り、5代目当主となる。「伝統は革新の連続である」を企業理念に掲げ、和傘の技術、構造を生かした照明器具のブランド「古都里」を立ち上げた。和風照明「古都里-KOTORI」で2007年度グッドデザイン賞中小企業庁長官特別賞、2008年#FORM(ドイツデザインプロダクト賞)受賞



(撮影/浅井憲雄)